

○「閑山子こと川平敏文のブログ」2017/2/2 に、

わたしの hp 2016/10/18 について、リアクションが出ていました。

2017/7/18)に、日文研・倉本班(説話と歴史資料のあいだ)で、「『説話』の多様性—文学・歴文化史」というタイトルで報告をしたときに、参加者の方から教えてもらいました。

川平敏文『徒然草の十七世紀—近世文芸思潮の形成』)について、鈴木貞美『日記と随筆—ジャンル概念の日本史—』(以下『日記と随筆』)中に記したことをめぐってのものです。以下、それぞれ『徒然草の十七世紀』、『日記と随筆』と略します。

## ●川平

前半、「随筆」の概念については、江戸時代の「随筆」概念と、近代における「随筆」概念が「まったく」異なるものではなく、共有する部分「も」あったことを言ったつもりであるが、ご理解いただけたであろうか。

## ○鈴木

『日記と随筆』では、江戸時代の「随筆」概念は、「部立なしの撰述」という規範が崩れ、「考証」一般(いわゆる考証随筆)に拡がってゆく傾向を指摘したつもりです。

近代における「随筆」概念も、考証を含みますから、「共有する部分『も』ある」のは当然ということになります。

しかし、川平さんのブログから、考証一般の意味で、「共有する部分『も』ある」と言っているようには、わたしは読み取れませんでした。

一例をあげて考えてみます。たとえば、江戸時代後期の「国学」者、石原正明は、『枕草子』『徒然草』を「随筆」としてあげています。評価はだいぶちがいますが。

『枕草子』を「随筆」と扱う態度は、戦後になって一般化したと『日記と随筆』では指摘しました。

それをもって、川平さんは、石原正明の「随筆」概念と、戦後の「随筆」概念には共通性もある、と考えておられるように、ブログの文面全体から、わたしには感じられました。

石原正は「随筆」の特徴を「即興的に書く」ところに求めています。

『枕草子』『徒然草』のスタイルを即興的にとらえたのは、あたっていると思います。そして、それを鈴乃屋の『玉勝間』の弁護につなげてゆきます。

ここには、「随筆」すなわち「撰述」スタイルという規範からの逸脱ないし転換があります。なぜなら、『玉勝間』は一応、撰述スタイルの考証ごとですが、『枕草子』は撰述スタイルの考証ごとではありませんから。これは、規範が崩れてゆく例のひとつです。

しかし、「随筆」すなわち「即興的」書き物という概念が、江戸時代後期に知識層のあいだに共有されていたとは、わたしは判断していません。広がっていたとしても、「国学」スクールのなかまでがせいぜいではないか、という判断です。

## ●川平

後半、中村幸彦の「内在的近代化論」は、やはり最も興味深いテーマである。

「雅文学」、「俗文学」という括りがすでに近代的な意識によって為されているという指摘は、本当にいま一度立ち止まって考えてみなければならない問題だと思う。近世から近代にかけての、俗文学の「成長」、文学の道徳からの「独立」、こういった図式が我々の描く「文学史」のなかに、潜在的に刷り込まれているのではないかという問題。そこで、現代人にとって面白い、分かりやすい文学史が描けるのかどうかは別問題として、足下を見直してみる必要はある。最後に拙著への論評の補足。これも有り難いご指摘である。

氏のおっしゃる「内在的近代化論」に、無自覚ながら影響を受けている点多々あるように思う。それが良いか悪いかは別として、無自覚であった点に気付かせていただいたことには、本当に感謝申し上げたい。

## ○鈴木

率直に認めていただけてありがたい思いです。

中村幸彦氏が、わかりやすくするために、1960年前後に成立した「純文学」対「大衆文学」スキームを用いた面も考慮しないといけない、とは思いますが。

江戸時代の文化を西洋化=近代化スキームによって分析することは、三枝博音が先導したもので、丸山政男ら戦中期の一部の知識人たちに見られます。わたしは、その流れて考えてよいと判断しています。

そして、さまざまなところに顔を出しています。宣長の態度を「不可知論」のように論じたりするものです。西欧近代の神をカッコに入れる経験主義の流れとはまるでちがうものです。なぜなら、宣長は「神は不可知だから尊い」という態度ですから。

比較して考えることは必要ですが、図式に引きずられてしまうと比較もまちがうからです。

ついでに言えば、西洋化=近代化スキームは、1930年代に伝統主義が台頭したことに対して、小林秀雄らが明治期以来の日本文化を論じる際にとった戦略的立場です。

わたしは、明治期文化を「西洋化=近代化」スキームではとらえられない。西洋の反近代主義も受け取った。反西洋主義(アジア主義)もあり、そのうちにも、近代化主義と伝統主義がある。最低四極を想定しないと分析できないということをくりかえし述べています。

## ●川平

が、やはり細部にあっては、少し当方の意図と認識にズレがあるようなので、さらにコメントさせていただく。

氏は、私が書いた慶長期における徒然草受容のあり方について、「漢学」と比肩しうる「和学」として展開されたと、読み取っておられるようだ。

当方は徒然草研究が、たとえば四書五経などの研究と比肩しうるものとして展開

されたとは考えていない。貞徳はかなり気合いを入れている方だとは思うが、羅山ら漢学者にとっては、徒然草研究はやはり、「余技」の部類に属することなのだ。しかし、たとえ「余技」であったとしても、それが従来の「和学」の常識に新風を送り込むインパクトがあった点を指摘したつもりであった。

## ○鈴木

そうでしたか、それは失礼しました。

わたしは「和学」は「歌学」が中心で、「詩歌」の関係から、それは中国の古典規範によるものであると考えています。だから、羅山らの『徒然草』への見解を読んでも、あまりインパクトを受けなかったのでしょうか。

これは「国学」スクール、とくに宣長の古典評価の基準につながる流れを、貞徳まで遡って読めるか、どうか、という問題が背後にあると思います。

## ●川平

また第二部の「教誡」から「実証」への図式が想定されているということについて。

「人情の「あるがまま」を直視する態度を実証主義と評している」とのご指摘があるが、人情論と文献実証主義を、私はリンクして考えているわけではない。

人情論は、いくらたくさん文献を集めて用例を列挙しても、絶対に生まれない。

これは解釈の前提というか、姿勢の問題であるから。文献実証主義は、それとは直接には繋がらない、技術的な問題であると思う。

つまり、教誡論から人情論へ、という図式は描いているが、教誡論から実証主義へという図式は、私は描いていないつもりである。

## ○鈴木

これは、川平さんの論考に、内在的近代化論の傾向があることの一例としてあげたことへの返答ですが、議論の方向がストレッチがッテいます。

人情・世態のありのままをとらえる態度を「実証主義」と見なすことは、ふつうに行われていることです。むしろ、「文献実証主義」もそういわれています。そこで、「実証主義」

にも、いろいろあると申し上げたのです。コントにも、ランケにも、イデオロギー性はあります。

事実ありのままにつく態度は、中国古代の史の編み方に認められる。ヘーゲルがそれを認めた。教訓を記すところには言及していませんが。

『日本書紀』には、その両方が認められる。史実の偽造をするのは、それゆえのことです。『神皇正統記』は、事実性を強く押し出しているからこそ、皇統の「一種姓」をもって、日本の特長とし、これはのちに中江藤樹によって、「易姓革命」の起こらない日本の美点と論じられてゆきます。それが明治期に加藤弘之によって「万邦無比の国体」論になる。

それらのことをもってしても、川平さんは、「近代に近づいているかどうか」を基準にして判断しますか、と尋ねたかったのです。人情論については、何をもって、「事実性」への接近とするのか、仏教的無常観もあれば、「骨肉の情」こそ、人情のあるがままと考える考え方もある。

中村幸彦氏は、後者をもって、人情ヒューマニズムとし、近代的と考えられた。それは日本の文壇にあった傾向の反映です。どんなに優れた学者にも、そういうことは起こる。

思考の道具である概念を磨き、鍛えることを日本の学界は、怠ってきた。そろそろ、本格的にとりかかってみては、どうですか、というのが、わたしの『日本の「文学」概念』からのちの一連の仕事です。背後にはクーンのパラダイム・シフト論とそれへの批判がある。

覚束ないところを少しずつ詰めながらの、本当に遅々とした歩みです。「日記」の語原説を『日記の文化史』で、再考したのも、その一例です。

わたしは概念の歴史の見直しの仕事が自分ひとりでできるなどとは到底、思っていません。一人でも多くの方が関心を寄せ、取り組まれることを願っています。 (了)